



心臓の弁を取り替える手術を説明する渡邊教授。生の映像は子供たちの心をとらえた

金大附属病院で親子体験学習会

(主催:金大附属病院心臓・総合外科、NPO法人プロジェクト医心)



子供たちも白衣姿で記念撮影。「将来はお医者さんに」と期待しているかもしれない付き添いの親は講義の間、別室で待機した



手術を終えて医局に戻った富田重之助が自分の手を使って器具の扱い方を教える

金大附属病院の医局のモニターに映し出されたのは心臓のアップ映像。渡邊教授が心臓を動かしたまま手際よく手術する様子を子供たちが見つめる。

女の子が質問した。
「手術の途中で気持ち悪くなることはないですか」
渡邊教授が手術室からマイクを通して答える。
「慣れているから大丈夫です。聞きたいことがあったら何でも言うていいですよ」

8月27日に金大附属病院心臓・総合外科で開かれた親子体験学習会「しんぞうってどうやってなおすの？」(北國新聞社など後援)のひとつである。参加したのは石川県内の小学生21人。中高校生を

対象にしないのは「進路や収入を考慮出す前の純粋で感受性豊かな時に本物の医療を見てほしい」(渡邊教授からだ)。

医局の中継画面は小田誠臨床教授が執刀する肺がんの手術に切り替わった。続いて手術を終えた渡邊教授が何事もなかったかのように医局に現れ、心臓の弁を取り替える手術の説明を始めた。

「参加者全員が科学や医療に興味を持ったかどうかは分かりませんが、本物を生で見る体験は子供の琴線に触れたと思います」(渡邊教授)

解剖体験で豚の心臓を触る子供たちの目は輝いていた。ひよつとすると、将来、この小学生たちの中から名医が誕生するかも…。



人間の心臓に近い豚の心臓を解剖する。「子供たちはこれを一番喜びますね」と渡邊教授(写真中央)。学習会は北國銀行が協賛した

しんぞうってどうやってなおすの?

手術を見つめる小学生 本物の医療を生で

循環器内科の心カテーテル検査を見学する子供たち



豚の心臓を触る子供たち。感触は忘れられない思い出になった



心臓の模型と手術器具を使ってバイパス手術を説明する山口聖次郎助教



人間の手より精密な動きができる手術用ロボット「ダヴィンチ」。子供たちはゲーム機感覚で使いこなし、医師を驚かせた